

計画 8-1

箱庭作成法を用いたチンパンジー
のパーソナリティー分析の可能性
武田庄平・早川東作(東京農工大学)

Ai、Pan、Pendésa、Chloéを被験者として、4条件(ブース内実験者同室+対象物なし、ブース内実験者同室+16対象物、ブース内実験者同室+7対象物、ブース内実験者不在+7対象物)を設定し、各被験者の砂の操作についての観察を行った。何れの条件も、30分間の実験を各被験者1セッションずつ行った。砂は、珪砂(10Kg)を水分含有率の低い状態で用いた。

実験の結果、まず、砂のみ条件よりも対象物有り条件の方が、砂操作時間が長い傾向が見られた。しかし、対象物が有ればいいというのではなく、その数は少ない方がよりよく砂を操作する傾向が見られた。また、実験者同室の方が、よく砂を操作するという傾向も見られた。対象物や実験者の同伴は、砂操作促進機能を有していたと言える。さらに、砂操作行動のバリエーションは、ブース内実験者同室+7対象物の条件で最も多く見られた。今回の実験においては、ヒト幼児に見られる「ごっこ遊び」の前駆的な操作は確認された。また、砂操作の階層性については、[手ですくう→対象物に移す→対象物から口に移す]という2段階程度のものは確認された。

計画 8-2

霊長類における自然法則の認識とその
発達
藤田和生(京都大・文・心理)

ヒト乳児は、動きや衝突などに関する種々の比較的複雑な知識を発達早期から示す。昨年に引き続き、環境に関するこれら物理的知識の獲得過程の系統発生を調べた。被験体はニホンザル、アカゲザル、ボンネットザル、及びカニクイザル全9頭である。これらのサル乳児に、種々の運動する物体の映像を見せ、凝視時間を測定した。実験は生後4週齢からおおむね20週齢まで反復した。関節点に光点をつけて暗黒を運動させる、いわゆるバイオロジカルモーション(BM)については、8週齢以降のサルは、ヒトのBMをその倒立映像やでたらめ配置の映像などよりも長く見た。一方、サルのBMについてはそれは見られなかった。本年度の被験体はサルの歩行を見た経験がほとんどなく、逆にヒトの歩行を見る機会は多かったことから、BMの認識には実運動を見る経験が必要な可能性が示された。物体の衝突における因果性の認識では、衝突して物体が動き出す映像よりも、衝突なしに物体が動き出す映像を長く見る傾向が、12週齢以上のサルでは明瞭に見られた。時期は遅いものの、この傾向はヒト乳児と同じで、サル乳児が物体は勝手に動き出さないことを認識していることを示すものと考えられる。物体の一体性を調べる映像では、ヒトと逆に、一体映像の方を非一体映像よりも長く見る傾向が持続した。この理由はよくわからない。同じ条件でヒト乳児を比較する必要がある。なお、これ以外に、チンパンジーの時空間情報の知覚的統合に関する実験的分析を引き続きおこなった。